

Start! New Water Life.

swim 水夢



Start! New Water Life.

[季刊誌・水夢] Vol.24

●2006年3月1日発行

●発行 ヤマハ発動機株式会社プール事業部



松本浩二(学校法人ノートルダム女学院 本部事務局次長)×鈴木大地

特集:水泳が教える。プールで学ぶ。 プールで最先端教育を進める 私立学校

YAMAHA NEW STREAM

YAMAHA POOL最新施設&製品

しもきた克雪ドーム

[季刊誌・水夢]

vol.24
2006.3



Relay Talk Vol.6
水夢人 河合純一

疑問、難問、ウエルカム。
プール鑑定隊が行く

水中運動核心論 ⑨ 宮下充正

ヤマハ流 今昔物語

1984



写真上: ヤマハFRPリニューアルプール
茨城県神栖町立息栖小学校(1994年)
写真下: ヤマハFRPリニューアルプール
京都府八幡市立八幡中央小学校(2003年)

理想のプールへリニューアル
水を使う上に、そのほとんどが屋外で寒暖の季節を過ぎすプール施設の老朽化は、想像以上に早い。さらに近年の、全身運動・水泳に対する高い評価は、より安全で使いやすいプールへと技術を急速に進化させている。
古くは30年以上経つプールを「リニューアル」。それは、利用者、指導者の使いやすさをも改善する技術を要する。ヤマハは1984年初のリニューアルプール工事から、古い躯体の活用など施工技術の改良、工期の短縮、「コストの軽減」などを図り、その技術は「ヤマハFRPリニューアル工法」として成熟する。傷みやすいプールが、耐久性を備えた使いやすいプールへ「進化」する。それはプールを使う人々の理想と夢が育てた技術といえるだろう。

営業所のご案内 プールのことならお気軽に・・・

ヤマハ発動機株式会社 プール事業部営業課 TEL 053-594-6512
〒431-0302 静岡県浜名郡新居町向島3380-67
北海道営業所 TEL 011-612-1923
〒063-0801 北海道札幌市西区二十四軒一条7-3-13
東北営業所 TEL 022-284-6160
〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区日の出町3-8-36
東京営業所 TEL 03-3454-2434
〒108-0023 東京都港区芝浦3-5-39田町イーストウィングビル3F

中部営業所 TEL 052-917-1590
〒462-0861 愛知県名古屋市中区辻本通2-34
関西営業所 TEL 06-6268-0520
〒541-0052 大阪府大阪市中央区安土町3-4-16船場オーセンビル4F
中国営業所 TEL 086-801-0156
〒700-0024 岡山県岡山市駅元町1-6岡山フコク生命駅前ビル10F
九州営業所 TEL 092-472-7815
〒812-0006 福岡県福岡市博多区上牟田1-11-1

<http://www.yamaha-motor.co.jp/product/pool/>



ヤマハ発動機株式会社

YAMAHA NEW STREAM

YAMAHA POOL 最新施設 & 製品



しもきた克雪ドーム・センターハウス

青森県むつ市真砂町8-8

■ 施設内容
〈センターハウス棟〉
25mプール、アトラクションプール、幼児用プール
採暖室、トレーニングジム
〈ドーム棟〉
アリーナ（野球、サッカー、テニス等と各種イベントに対応）



この施設は「むつ市ウェルネスパーク」の中核施設として整備され、既存のマリーナや周辺の公園との連携した計画でスポーツ・レクリエーションゾーンとなる予定です。

冬季は風雪・凍結などの厳しい自然と共生する青森県むつ市。2005年7月、この地域で1年を通し住民が活力を育める運動施設「しもきた克雪ドーム」が完成しました。
上からみると正方形のドーム棟は、野球やサッカー、ゲートボールまでさまざまなスポーツが開催できます。また、中庭を挟みドームと平行に建てられたセンターハウス棟には、陽光豊かで明るい空間に25mプール、幼児用プール、アトラクションプールが建てられ、トレーニングジムとともに、住民の基礎体力、筋力トレーニングや健康増進をサポートします。

厳しい冬に憩いを育てる
下北半島地域の中核拠点

C O N T E N T S

- 3 特集：水泳が教える。プールで学ぶ。
- 5 特集：水泳が教える。プールで学ぶ。
対談：鈴木大地×松本浩二(学)ノートルダム女学院本部事務局次長
- 9 プール鑑定隊（東京都杉並区日本大学鶴ヶ丘高等学校）
- 11 YAMAHA INFORMATION
- 13 水中運動核心論 Presented by 宮下充正
- 14 Relay Talk Vol.9 水夢人 河合純一さん

プールで最先端教育を進める 私立学校



66 東京都調布市立調和小学校
地域にも開放されている屋内プール。全国初のPFI方式で運営される義務教育施設として注目を集める。
(本誌18号特集より)



78 東京都太田区立南浦小学校
築30年以上が経過し、劣化の目立っていたコンクリート製プールを改修。
(本誌21号特集より)



どんなに時代が変わろうと、教育の本質は変わらない。しかし、子どもたちを取りまく状況が変われば、それに合わせて教育内容が変化するのは当然だろう。

また少子化に伴い、学校は生徒を獲得するためにそれぞれの教育方針に特色を強く打ち出すことが大きな命題になっている。学校が変わるなら、学校施設であるプールが担う役割もまた、変わっていくのが当然だろう。

水泳技術の習得と向上から、基礎的な運動能力促進へ。そしてさらに「心」と「体」を育むための運動施設へ。今回は、学校プールが果たす新たな使命について考えてみたい。

子どもたちの運動能力を向上させるためには、日常生活の中で身近に身体を動かせる施設があることも重要である。そのため、学校の運動施設を放課後や休日にも開放する学校が増え、その発展形として、学校プールを地域住民だけでなく、近隣の幼稚園などに開放しているケースや、地域住民にも学校施設を開放する「コミュニティスクール」も増えている。

柔軟な変化を求められる 学校プールの役割。

島国・日本において、海や川で泳げることは、自分の身を守るうえで必要なことであり、本来、学校プールの意義は、運動能力や体力づくりとともに水泳技術の習得、向上にある。しかし近年は、これに加え「子どもたちの基礎体力の向上」という点が大きくクローズアップされている。文部科学省の「体力・運動能力調査」によると、子どもたちの体力・運動能力は、昭和60年頃を境に、低下傾向が続いている。親の世代と比較しても、体格は向上しているにも関わらず、50m走やボールの遠投など、テスト項目のほとんどで能力が低下している。

さらに最近では、転んでも手を出せない、垂直飛びができない、靴のひもが結べない、スキップができないなど、基本的な身体能力が低下している子どもが増えている。

こうした体力や身体能力の低下を食い止めるため、バランスの取れた全身の発達を促し、生涯を通して継続できる唯一のスポーツとして水泳の重要性が見直されている。

基礎体力の維持・向上のための 運動施設として。



12 東京都千代田区立麹町小学校
屋内温水プールの完成により、プールの授業は飛躍的に増加。子どもたちの基礎体力の向上に大きく貢献している。
(本誌22号特集より)



84 ノートルダム学院小学校/京都

また、日常的な運動施設という観点から、通年利用可能な温水プールに切り替える学校や、老朽化に伴い子どもたちがより安全で快適にプールを利用できるよう、リニューアルする学校も目立ってきている。

もちろん、その背景には、深刻な少子化問題や完全週5日制の導入など、学校を取り巻く環境の変化がある。学校施設の余剰時間が増え、学校の統廃合も進むなか、学校施設も柔軟に変化していく時代が到来したと言えるだろう。

教育ポリシーを反映させた 学校のプール。

独自の教育理念を掲げる私立学校の場合は、生徒確保の面からも、教育ポリシーの明確化や、学校施設の整備がこれまで以上に求められている。

また、社会的にも文部科学省でも高等学校教育の二環として、特色ある学校・学科づくりや、選択中心のカリキュラム編成の推進など、教育の個性化・多様化に力を入れている。

「教育ポリシー」の体現、という役割も、これからの体育施設には求められるのかもかもしれない。言い換えれば、何を目的にプールを利用するのかを明確にし、その目的に準じたプールの造り、利用法を考えていくかが、これからは重要になってくるのである。

独自の教育ポリシーを打ち出し、それを実践する学校プール。そのモデルケースとして、今回多目的プールを完成させた「ノートルダム学院小学校」と、健康・医療・福祉のスペシャリストを育成するためにプールを活用している「新潟健康福祉大学」を取材した。



プールは「生きる力」を育む教室。

ノートルダム学院小学校は、1951年の開校以来、「徳と知」を教育目標に掲げ、子どもたちの精神性と人間性の育成に力を注いでいる。開校50周年事業の一環として同校が完成させた新プールのいちばんの特徴は25m×20mの正方形に近い形状を持つ遠泳対応のプールであること。鈴木大地と岩崎恭子の両氏を招いてのプール開きから約一年半を経て、同校のプールは、どんな効果を子どもたちにもたらしつつあるのだろう。お話をうかがってみた。 松本浩二(学校法人ノートルダム女学院 本部事務局次長)×鈴木大地

■競泳と遠泳の両方で、新しいプールの効果。

鈴木 ここノートルダム学院小学校は、プール開きの際にもお招きいただいているので、今回が2度目の訪問になります。あれから一年半がたちますが、その後プールの活用状況はいかがですか？

松本 あの時鈴木さんと岩崎恭子さんに来ていただいたことを本当に感謝しています。お二人には、模範泳ぎを見せていただき、競泳にも参加していただきました。生徒たちに、水泳のアドバイスもいただきましたよね。おかげさまで、今年の西日本の水泳大会では、素晴らしい記録を出すことができました。

鈴木 それはすごいですね。
松本 子どもたちには、やはり一流のもの、本物を見せるべきなんです。おのずと結果が違います。もう一つ、新しいプールの効果は、遠泳にもあらわれました。
鈴木 そう、ここはプールで遠泳も行っているんですからね。

松本 3人隊列を組んで練習を重ね、5年生になると遠泳合宿に参加し、海で練習の成果を出します。その際、グループ分けをするのですが、昨年は2000m泳ぐAグループが約40名、1200mのBグループが80名、800mのCグループが20名くらいだったのに対し、今年はCグループがゼロになったんです。

鈴木 全体のレベルが上がったわけですね。それにして小学生で2km泳ぐというのはすごい。

松本 新しいプールは可動床ですから、水深1.5mに設定すると、ほとんどの生徒は足がつきません。これまでは、疲れるとチョンチョン足をつくことができたので、それで泳げる気になつていた子ども、今はそれができない。今年は、一人の退水者もなく全員が完泳できました。

松本 心という字を百回書いたから、心がわかるわけではないのと同じだと思います。

■人間の根源的な力、「心」を育むために。

鈴木 そもそも遠泳教育は、いつから始められたんですか？

松本 5年前です。奇しくも文部科学省が、公立校での遠泳を禁止した翌年からです(笑)。新プールを遠泳対応にすることに對しても、理解を得るのに時間がかかりました。京都市の教育委員会でも、学校プールは、25m×6コース×水深1.2mという規定をしている。しかし私たちは、教育ポリシーを優先すべきだと考えています。まさに私学だからできることというのがあるはず。私たちが遠泳にこだわる理由は、「教育とは、突き詰めれば子どもたちの人間性を育むこと」という教育ポリシーにあります。目標を掲げ、いっしょにがんばりに頑張る。辛さを乗り越え、泳ぎきる。その先にあるのは、力を尽くしたもののだけが得られる達成感。自分の身体を使って掴み取る自信。それが、子どもたちを大きくし、生きる力になるんです。

鈴木 実際に、遠泳合宿を6年間の一番の思い出としてあげる生徒も多いそうですね。その経験は、おそらく6年間だけの思い出ではなく、一生の財産として子どもたちの中に残り続けるのではないのでしょうか。

松本 このプールを通して、私たちは子どもたちの心を育てたい。学び、生きる力、そういう人間の根源的な力を育てていきたいと思っています。

■プールを、「心」と「頭」と「体」を育む場。

鈴木 このプールは、近隣の幼稚園にも開放されているそうですね。またオフィースには人



■自分の身体を使って得る感動。

鈴木 プールで自信をつけてから、いざ海へ完泳できたときの達成感は大きいでしょうね。

松本 泳ぎきった子どもは、顔が赤いですよ。みんな、本当にいい顔をしています。最初の練習では、足がつかないのを怖がって先生にしがみついていた子ども、ちゃんと泳ぎきることができました。本校には、ハンディキャップを背負っている生徒もいますが、そのうちの一人は、進行性の筋ジストロフィーで普段は車椅子を使っているんです。しかし、彼は水に沈むことを怖がらない。沈んでも、ぶかーと浮かんで、ゆっくりに泳ぎ進んでいく。他の子は1時間ほどで完泳しますが、彼は約2時間かけて1200mを泳ぎきることができました。そのとき、付き添っていたお母さんは海の中にまで駆け寄り子どもを抱きしめていましたし、既に泳ぎ終わった生徒たちも、先生も保護者も、みんなが歓声をあげて彼を迎えた。私も感動しました。思わず涙が出ましたね。

鈴木 光景が目には浮かびます。手放して喜べる瞬間ですね。

松本 中学合格とか、大学合格とか、人生には嬉しい局面が多々あるでしょうが、ああいう感動、自分の身体を使って得る感動は特別なものだと思います。鈴木さんも金メダルを取った時に感じられたでしょうが、子どもたちにとっては金メダルと同じくらい達成感なんです。

鈴木 そう、この経験が子どもたちには大きな力になると思います。

松本 そうですね。ある意味、命をかけて泳ぐからこそ、生きる意味がわかるし、自信につながるんです。この経験があるかないかで人間は変わるし、この経験が人生の原点にもなると思います。人間は回帰すべき場所を持っていると強い。それが、生きる力になります。このプールは、教科書では教えることができない。工芝を敷いて、多目的広場として使われている。非常に高密度な使い方をされていますよね。

松本 確かにプールとして利用するのは3ヶ月ですが、これを3ヶ月しか使えないと捉えるか、3ヶ月も使えるんだと捉えるかは、まさにその学校のスピリッツ次第ではないでしょうか。本校の教育は、徳育、知育、体育を三本の柱に据えています。頭と体と心は、それぞれに不可分なんです。頭があって体が、体があって頭がある。それを統合するのが精神です。私たちは、このプールを通して、子どもたちの心を育みたいと考えていますし、もちろん体づくりにも役立てたい。さらには、身体を動かすことで脳の発達を促したいとも考えています。「二兎を追う者は兎を得ず」ではない、「三兎を追う者は三兎を得る」んです。

鈴木 心を育てることで、体を育てる。体を育てることで、頭を育てる。単なる精神主義だけで遠泳を取り入れているのではないことが、よくわかりました。プールは子どもたちの身体だけでなく、心を育み、頭を育てる役割を担うことができるんですね。今日は本当にありがとうございました。



教育、社会、エネルギー、 全ての環境を考慮した 多目的プール。



■不使用時は多目的広場に。
階下には雨天体操場。

ノートルダム学院小学校のプールは、25m×20m×10コースの可動床型。専用通路で教室側の校舎から直接行けるよう、プールとシャワーなど設備、更衣室、倉庫を2階とほぼ同じ高さの屋上に設け、1階を機械室などとした。

以前のプールは、25m×13mの標準タイプでコンクリート製、地上にあつたことを考えると、コンセプトから新されたことがわかる。可動床導入により、学年に応じた指導が可能になったことも大きなメリット。オフシーズンには床を上げフラットにし、人工芝を敷き詰め25m×35mの多目的広場として利用している。

「言ってみれば教室とながった、ヘラダ型のコートですね。運動場や体育館のようにわざわざ靴を履き替えなくても、そのまま教室からすっとな出ていける。机について勉強をするのと同じ感覚で、遊びが学習になるスペースです」と話すのは、同校の田島美穂教務主任。

プール下部の機械室の余剰スペースは、雨天体操場として活用。また運動場に面したプール施設の側面にはラントが格納されており、運動会などの行事の際に使われている。



■省エネはもちろん、
安全もまた一つの環境。

更衣室の屋根に設置されたソーラーパネルにより10kwの発電が可能で、これにより年間約30万円が節約されている。発電の状態はプール入口の壁面で表示され、児童はエネルギーが生み出される様子を間近に知ることができ。

また、プールのオーバーフロー水は、約750トンの容量を持つ地下タンクに貯められ、生活雑排水(主にトイレの便器洗浄水)等に利用される。これで年間約100万円の節約。さらに地下には550ミリのパイプを通し、地熱を食堂「マリアンホール」に送り込むことで、夏涼しく冬暖かい環境づくりを実現している。

安全面への配慮もあってプールや更衣室を2階に。1階のプールでは、侵入しやすきこと等、児童を対象にした犯罪対策も考慮し、2階への設置を決めた。

環境という「エコロジー」ばかりに目を向けてきたが、「安全」も一つの環境。「犯罪を誘発しないことも環境への取り組みだ」ところを、このプール施設は指し示している。

大地の 眼

身体も、心も、強い人へ。

ノートルダム学院小学校では、遠泳指導だけでなく、子どもの脳を育む教育活動「コアマックスアクティビティ(脳幹刺激運動)」にも取り組んでいる。これは、東大の小林寛道教授の理論に基づくもの。小林教授とは、「子どもの体力向上委員会」のメンバー同士として日頃から親交があり、先日「子どもたちの体とスポーツ」をテーマにしたシンポジウムでご一緒した。奇遇を喜びと同時に、考えに賛同し、実際、教育に取り入れている学校を見学できたことを非常に嬉しく思っている。

確かに現在は、基本的な身体能力が低下している子どもが多い。目を疑うような子どもたちの事件も目立つ。彼らに、生命の尊さを教え、愛することと愛されていることを教え、生きていく喜びを教えることの重要性。そして、水泳やプールが、その一助になる可能性を秘めていることを、今回の取材で改めて感じることができた。単に生徒の「身体づくり」や「運動能力の向上」にとどまらず、もっと根源的な人間力までを育もうという意図のもと造られたノートルダム学院小学校の遠泳型可動床プール。水泳やプールが、子どもたちのためにできることは、まだまだ多い。



スペシャリスト育成と 地域活力を支援する。

■医療・福祉のスペシャリストを
育てる独自の温水プール施設。

新潟医療福祉大学は、「いの中の質を学ぶ大学」をスローガンに、「QOL (Quality of Life)」の向上をサポートするスペシャリストを育成している日本ではまだ数少ない大学である。2005年春には、スポーツ医学やスポーツマネジメント、スポーツ教育を学ぶ健康スポーツ学科を新設。時を同じくして、25m×6コースの屋内温水プールを完成させた。

コース幅が2.5mで、(財)日本水泳連盟の認定を取得している公認プール。コースロープも最新型を採用。塩素薬剤を使用せず、水の電気分解により浄化を行うシステムを導入。プール側面にフォームチェックを行える水中窓、プールでの講義を考慮しプールサイド両側には床暖房を設置するなど、随所に独自の工夫が見られる。

また、プールが入った建物内は、すべてバリアフリー。環境に配慮し、熱源を重油ではなく灯油にしているのも特徴である。

■時代が求める人材を
地元とともに輩出するプール。

新潟県は教員試験で水泳が必修科目であり、スポーツトレーナーや教員を目指す学生が多い同大学の健康スポーツ学科では、プールを4泳法のマスターや水中歩行指導の実習に使用。また、医療や栄養学を学ぶ他学科にも、水中で行うリハビリテーション実習等のカリキュラムがある。

また、水泳部、サッカー部、バスケットボール部を強化クラブに指定しており、毎日午後から約4時間は水泳部の練習や、他クラブの選手のリハビリや冬季練習メニューにプールを利用している。

健康スポーツ学科の助教授で、水泳部の監督の下山好充氏は「先日は、新潟県内の小学生以上の水泳選手の記録会もこのプールで300名を集め開催しました。これも地域貢献のひとつと私たちは考えています。また、本大学の関連病院である新潟リハビリテーション病院の患者さんや、同じく関連「プロスポーツ団体である「アルビレックス新潟」の選手のリハビリへの活用も現在検討中です」と話す。その活用は、授業や水泳部の利用に限定した、従来の大学でのプール利用とは異なり、多岐に渡っている。

医療・福祉のスペシャリストを育て、同時に地域活力を支援し社会福祉に寄与する、新しい大学の新しいプール施設と言えるだろう。

特集 次世代を育てる学校プール

新潟医療福祉大学 新潟市

下山 好充氏 (しもやま よしみつ)
健康スポーツ学科助教授
水泳部監督・ヘッドコーチ

大学では「コーチング論」や「運動学」を担当。2004年まで約10年間、筑波大学水泳部コーチとしてオリンピックをはじめとする国際大会の日本代表選手を育成。その経験を活かし、現在水泳部の監督とヘッドコーチを兼任。同校のプール建設に、氏の意見が大きく取り入れられている。



プール鑑定隊

指導しやすく、練習しやすい。
より本格的な競泳用プール
にリニューアル。

昭和46年建設のコンクリート製室内温水プールを
リニューアル。本体は標準プールと同じ精度に。指
導の声が聞きとりやすい吸音板やゴムチップ製プー
ルサイドで快適な環境を実現した。



今回の訪問先
日本大学鶴ヶ丘高等学校
(東京都世田谷区)



Check 1
コンクリート製の旧プール。当時、学校施設での室
内温水プールは国内でもめずらしい存在だったと
想像されるが、30年を経過し表面の剥離は深刻化
していた。



Check 2
剥離したコンクリートの表面には、凹凸部分が増
え汚れが蓄積し、コケの発生の温床に。ろ過機の
入れ換えなどで水質は保たれていたが、衛生的な
環境維持は課題となっていた。



Check 3
天井部の改修や、ボイラー、ろ過機の入れ換えな
どこれまでも定期的な改善が行われてきた。プー
ル本体の改修に加え、声の反射をおさえ、湿度を
下げることもポイントとなった。



ヤマハマンがゆく

大西 学
(ヤマハ発動機株式会社プール事業部東京営業所 工務課)
「ヤマハFRPリニューアル工法は、ユニットプールの強みを活
かし短期間で施工できることが魅力だと思います。日大鶴ヶ丘
高校の場合は、プール施設の窓枠を外して建物となりのテニ
スコートから内部に搬入することができました。こうした費用や
時間の点、工法として元の躯体を活用することも含めてトータ
ルでのムダも省ける工法だと感じます。実際お客様も喜んでい
ただいてもらえる一番のポイントはこの点だと思いますね」

Point 1
美しいプールで生徒
たちの泳ぎをサポート

ろ過機の性能が充分だったにも関わ
らず、旧プールは床面の劣化と汚れに
より、良い環境とは言えなかった。
FRPの美しい表面と、透明な水、新
たに設置された間接照明の効果もあっ
て、美しい環境に整備された。
改修工事でのプール本体の設置は、
夏休みを使って行われた。過去30年の
指導経験からプールでの授業スケジュー
ルは年間を通して行われているため、夏
期の方が安全で早い工事できた。

Point 2
標準基準と同レベルに
高精度の競泳プール

授業での水泳、そして水泳部と熱心
なプール活用を行う日大鶴ヶ丘高校。
新プールの精度も、できる限りハイレベ
ルなものを目指し改修を計画した。
精度を左右する躯体を、旧プールの
まま使えない改修工事、可能な
限り調整を行った結果、標準プールと
同等の数値を確保。より本格的な競泳
用プールへの進化を果たした。

Point 3
教師の声を聞きやすく
練習効率を上げる改善工事

プール施設の環境改善は、プールサイ
ドの素材変更による安全確保、湿度対
策として給排気口の新設による換気機
能の向上、そして室内の残響音の解消
が検討された。
特に、天井と室内形状の問題から、
声が反響し2メートル先の相手とも会
話が成り立たなかった残響音の問題は、
対策として天井に吸音板を設置。結果、
改修前8秒あった残響が2秒と4分の
1まで短縮された。



日大鶴ヶ丘高校事務課課長補佐・山口修氏(左)
と長永スポーツ工業(株)設計部・南里勇人氏(右)

辰巳国際水泳場で水泳大会
日本大学鶴ヶ丘高等学校は、日本大学建学
の精神に則り、高校・大学と貫いた教育で、パ
ランスのとれた人間形成を目指しています。
昭和26年から50年以上勉強と運動の両立を
目指し、昭和49年には室内温水プールを建設、
年間を通じた水泳授業を行っています。
年に1度、全校生徒(現在約1,200名)参
加で行われる水泳大会は、国内競泳のメッカ。
東京辰巳国際水泳場で開催。スポーツとして
水泳やプール利用への考え方は、大変熱心な
校風と言えるでしょう。

成熟した水泳メニューを効果的に
プール建設から約30年。年間を通じて授業
や部活動に使われてきたプールの課題は、プー
ル床面の劣化の改善、声が聞きやすい残響処
理、湿度の低下の3つにありました。
同校事務課課長補佐の山口修氏は、計画当
初を振り返り改修のポイントについて「プー
ル本体は再塗装、全て造りなおすか、かぶせる
かの3つを考え、コスト、工期と結果からヤマ
ハFRPリニューアル工法に決定しました」と
話していただきました。また、山口氏は工法の
最終確認に、ヤマハ発動機(株)プール事業部
の本社を訪ね、プール工場を見学されました。
「詳しい説明を聞いて安心しました」とも。
06年6月初旬から工事の準備に入り、7月
から現場での作業。プール本体は搬入から9
日で設置を終え8月末に工事を終了しました。
この工事を管理した長永スポーツ工業(株)
の南里勇人氏は「工期も短く、躯体をいじら
ずにユニットの精度で対応がきくことがすば
らしいですね」と話してくれました。
「何より生徒が『泳ぎやすい』と言っていま
すからね」と山口氏。同校の経験を源にした
改修工事が、さらに密度の濃い水泳教育を可
能にするプールを完成させました。

YAMAHA Information



六甲アイランドスポーツ・健康施設「デカパトス」がオープン

7月1日、神戸市東灘区向洋町(六甲アイランド)にスポーツ・健康施設「デカパトス」がオープンし、神戸市関係者や、同地区自治会関係者など70名が参列し、神事やオープニングセレモニーが行われました。

オープニング当日はあいにくの雨模様となりましたが、全天候型の屋根を備える同施設内のフットサルコートでオープニングセレモニーが行われ、テープカットと神戸市消防音楽隊のファンファーレ演奏、そして地元幼稚園児100名の拍手で祝福しました。

セレモニーに続いて、オープニングイベントでは地元神戸で人気のアカベラ女性グループのコンサートが回復をみせた六甲アイランドの青空のもとで行われ、当日の無料入場サービスもあつて2000名を超える来場者でに



ボディスライド、リバーライドの2つが楽しめるウォーターライダー

造波プール



造波プール

ぎわいました。

翌日には水の道化師トウリトネスのパフォーマンスショーが開催され、造波プールをステージに観客の笑いを誘いました。

プールゾーンは、造波、流水、ウォーターライダーなどのレジャー志向のプールと、せせらぎやミスト、噴水などの水とのふれあいを演出するゾーンが一体となった構成で、小さな子どもから大人までが日常を忘れゆくりと過ごせる水の空間になっています。

プールとともにデカパトスを構成するフットサルコート「セレンゴ6-air(ロクアイフットサルクラブ)は3面の内2面を全天候型コートとし屋根が設けられ、イタリア製の人工芝、土にかわる合成樹脂チップ、コートごとの更衣室などで最高の環境を完備しています。

またインラインスケートの世界大会「X games」のチャンピオン・安床ブラザーズのホームでも

ある「g-skates park」は、アクション・スポーツの本場アメリカの設備と同水準のハーフパイプ、国内では珍しいスクエアポウルなど、初心者からプロ競技者までをサポートしています。プールゾーンと一体化した施設として、地域独自のスポーツコンプレックスを形成しています。



隣接するマリナーパーク駅



子どもプールのウォータープレイシステム

全自動で水中清掃 新型プールクリーナーを発売

6月、水中でプールの床や壁面を清掃する、新型プールクリーナーが2機種発売されました。清掃は、自動モードとリモコンによるマニュアルモードの2種類が選べ、自動モードでは、プール使用後水中にセットすれば床面と壁面にももってプール汚れやゴミを取り除きます。

25メートルプール対応の「ダイナミックプロX」は、小型プールから25メートルプールまで形を選ばず、全てのプールに対応可能です。また、12メートルプール対応の「プラスバッテリー」は、コードレス仕様で様々な形状の小型プールに対応できます。

小型・軽量設計で移動やセットも扱いやすく、工具不要のワンタッチ構造で、フィルター清掃も簡単など、充実の機能が清潔で安心なプール環境をサポートします。



ダイナミックプロX(左)とプラスバッテリー(右)。後ろは標準装備の移動用キャディ

東宮御所にワイワイプールを納入



東宮御所に納入されたものと同型のワイワイプール。(大きさなど詳細は異なります)

5月下旬、宮内庁を窓口に赤坂御用地内の東宮御所にワイワイプールの基を納入しました。

東宮御所には、今までも74年(昭和49年)頃に造られた鉄製のプールがありました。老朽化が進み、現在は使用が難しい状態となっています。

ワイワイプールは、ステップの形状やラダーハンドル、排水性能など毎日の使いやすい工夫を追加した最新の据え置き式プールです。納入したプールは、敬宮愛子内親王が使用される予定です。

第8回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 にチーム北島、宮下充正先生ら

6月22日、第8回秩父宮記念スポーツ医・科学賞(財団法人日本体育協会主催)の表賞式が都内で挙行されました。

この中で発表・表彰された奨励賞には、「高地トレーニング医・科学サポート研究班(代表/青木純一郎氏)と、「北島選手を中心とした競泳選手への医・科学サポートチーム(代表/岩原文彦氏)が受賞しました。

奨励賞は、スポーツ医・科学の研究と発展に貢献し、普及発展、競技力向上に顕著な実績をあげたもの、あるいはグループを対象とし、今回受賞された高地トレーニングの研究スタッフには、本誌でおなじみの宮下充正放送大学教授や、01年のヤマハスポーツ文化フォーラムにご出演いただいた、若吉浩二奈良教育大学教授もメンバーとして参加し受賞されています。

お台場冒険王に特設プール今年も ウォーターボーイズショー'05

東京お台場の特設会場今年もフジテレビの「お台場冒険王」が開かれ、水中パフォーマンスショー「ウォーターボーイズショー」も3年連続で開催されます。

03年を皮切りに毎回進化を続けるショー内容は、今年もさまざまな趣向で冒険王屈指の人気を呼ぶことが予想されます。

ショーの舞台となる特設プールは、今年もヤマハスクール25シリーズが採用され、7月16日から8月31日まで47日間、1日3ステージ無休で行われるパフォーマンスショーを支え、閉幕後に解体撤去されます。



SWIMBITO

「水夢人」

Vol.9
Relay talk

人の心にも、バリアフリーを

水泳選手としてパラリンピック4大会に連続出場。障害者スポーツの環境を改善するため活動中。

河合純一 氏

ヤマハと共同開発した タッピングステッキ

初めてパラリンピックに出場したのは92年のパルセロナ大会。17歳の時でした。水泳を始めたのは5歳。近所のスイミングスクールに通い始めたのがきっかけです。15歳の時に失明しましたが、見えなくなったから水泳をやめろ、という発想はまったくありませんでした。ただ泳ぐことが好きで、もっと速く泳ぎたい、うまくできないことをできるようにしたい、それだけでした。

アテネ大会では、ヤマハさんに作っていただいたタッピングステッキが活躍してくれました。視覚障害のある水泳選手に壁までの距離を知らせるため、選手の手で触れて合図するための棒が「タッピングステッキ」です。従来は、モップの柄や釣竿などにテニスボールを付けただけのまったくの手作り。軽さ、丈夫さ、コンパクトさなどの面が改善され本当に使いやすくなりました。

水泳選手としては、もちろん北京大会という目標があります。おかげさまで、アトランタからアテ

PROFILE：河合 純一（かわい じゅんいち）
1975年4月、静岡県浜名郡舞阪町に生まれる。早稲田大学教育学部を卒業後、母校である舞阪中学校の社会科教師となる。パラリンピックには、水泳選手として92年バルセロナ、96年アトランタ、00年シドニー、04年アテネの4大会に連続出場。通算19個のメダルを獲得した。日本パラリンピアンズ協会の発起人として、障害を持つ選手の環境改善を目的とした活動にも取り組んでいる。

ネまで3連覇した種目もあるし、記録を伸ばしたい気持ちもありません。ただと私は、個人的に4連覇するとかメダルを取ることよりもむしろ、これからいかに障害者スポーツを取り巻く現在の状況を改善していけるかに関心があります。もし、水泳を続けていなくなったら、私の人生は大きく変わってしまいます。ですから、そうした活動を通して水泳界に恩返しをすることが、今の私の最大の課題です。

お金が集まり、人が集まり、 初めて状況は変わる

障害者のスポーツ選手が置かれている状況は、非常に厳しいものがあります。とにかく、お金がありません。善悪だけではどうしようないことが多々あるわけです。多くの企業を訪問し、サポートをお願いしているのですが、景気回復の兆しが見えるようになった現在も状況は変わらない。悲しいけれど、それが現実です。

障害者と健常者のトップアスリートを比べてみてくださいます。オリンピックでメダルを狙える選手は、ほぼ競技に専念することが出来ます。しかしパラリンピックの選手の場合は、ほとんどが仕事をしています。もちろん、プロとして認められていないという理由もありますが、それ以前に日本では、障害者の選手は社会人として仕事をしながらスポーツに取り組むことで、はじめて価値を見出されているわけです。障害者スポーツは、あくまで「障害者のためのスポーツ」。それが日本の考え方。オリンピックに比べ、パラリンピックにお金が集まらない原因は、そこにもあるのかもしれない。

もちろん、オリンピックの選手の中にも、仕事に就いている選手は大勢いますし、競技に専念することがベストだとは思いません。私自身、教師としての自分も重要ですから、状況が変わったとしても教職を離れないでしょう。しかし、今はその選択が与えられていない。せめて選べる環境を



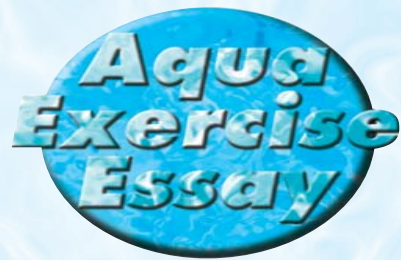
作れたらと思っています。

障害者に立ちほだかるのは、 施設ではなく「人の心」

最近、バリアフリーの施設も増えてきました。しかし、本当に重要なのは、すぐ立派な施設がポツンとあるより、誰でも使えるプールが身近に存在することではないでしょうか。私は、スポーツ施設のハードの問題はある程度はソフト面、つまり「人」で補えると考えています。エレベーターがない、段差がある、それを物理的に直すお金がないなら、人の力で解決はできないだろうかと思っております。

たとえパラリンピックの選手でも、近所のスイミングプールやスポーツクラブで入場を断られるケースは多々あります。設備の不備や、専門指導員の不足を理由にしていますが、いかにせよ「あなたに障害者だから断るのではなく、「あなたに満足だけはないから断る」だから人権侵害ではない」というのが、施設側の言い分です。水泳指導のフロが「障害者は教えられない」と平気で言えることにも憤りを感じます。

こうした社会の見方や政策を力づくでも変えない限り、状況は好転しないでしょう。社会の理解と協力を得ることで、障害者を含め、誰もがもっとスポーツを楽しめる環境が創られることを心から願っています。



水中運動核心論

Teaching 9

presented by 宮下充正

世界の水泳プール さまざまな工夫の変遷 《その1》 1960年代から1970年代

過去40年近くの間、外国で開催された学会へ参加したとき、あるいは、日本代表水泳選手団の遠征に同行したとき、いろいろなプールを見る機会があったので紹介したい。

アメリカ：エージグループ水泳用プール

東京オリンピック（1964年）で、アメリカの10代の女子選手が大活躍した。1960年代は、アメリカのエージグループ全盛期であった。

そこで、アメリカの競泳選手育成の背景を調べるために、西海岸カリフォルニア州のサンタクララからロングビーチにかけての大小さまざまなスイミング・クラブを訪れた。西海岸は、1年を通して温暖な気候である。しかし、夜間の冷え込みが強く、屋外プールに加熱装置が備えられていた。当時日本にはこのようなプールはほとんどなかった。めずらしく思われた。だから、エージグループの選手たちは、1年を通して水中トレーニングに励むことができ、同じスイミング・クラブのコーチが指導に当たっていた。また、それぞれの子どもは、4種類の泳法を身につけるように練習が行われていた。

このように、低年齢から年間を通して一貫指導を行うこととして、専門種目を早めを決めるのではなく、まず4種目がこなせるようにすることが、優れた選手の育成に不可欠であると結論づけた。そして、日本水泳連盟は、再建を目指して子どもからの水泳指導の方針が立てられ、屋内温水プールを所有するスイミング・クラブの誕生を推奨したのであった。

フランス：古い屋内温水プール

1970年代は、ヨーロッパへ出かける機会が多かった。フランスでは、水泳連盟の事務所

を訪ねた。その建物に囲まれるようにパリオリンピック（1924年）が開催された屋外50mプールがあった。訪れた当時も使用可能で、夏季バカンス中でたくさん市民が遊泳と日光浴を楽しんでいた。

フランス留学中の友人に電話帳でプールの所在地を調べてもらい、5〜6階建てのアパートが立ち並ぶ住宅の中心街に行った。プールの入口とは思えないところを入ると一階から2階が吹き抜けになった総タイル張りのL字型の温水プールがあった。相当古いプールと思われたが、造りはしっかりしていて、訪問した層ごは母と子が水中運動を楽しんでいた。めずらしかったのは、パリの中心を流れるセーヌ川に浮かんでいるプールであった。船がプールがプールが船か、とにかく浄水装置さえしっかりしていれば水は無料で使え、排水も簡単である。日光浴も楽しめる遊泳用プールといえよう。



フランス・パリーのセーヌ川に浮かんでいるプール

ドイツ：うやましかったゴールドマン

西ドイツは、第二次世界戦争後、ゴールドマンに基づいて各都市に、運動施設の整備を図ってきた。その一つとして、当時の首都ボンに近郊の広さであった。芝生の広場に、春から秋にかけて利用できる屋外温水50mプールが

2面並んでいた。加えて、冬季用の屋内温水25mプールが2面あった。その後、西ドイツで水泳のヨーロッパ・カップが開催された折に、別の町のプールを見た。仮設スタンドを設けた屋外温水50mプールで競技会が行われていたが、広い芝生をばさんで円形の遊泳用のプールがあった。当時日本では、各地で学校に25mプールが、また国体開催地には50mプールが建造されていた。それらは加熱装置のないコンクリートむき出しの屋外プールばかりであった。そして、わずか30〜40年経った現在、それらのプールは建て替えが迫られている。西ドイツのプールが改築され始めているかどうか確認していないが、せつかく建造するならば、もっと長い期間使用できるように、しっかりしたプールを造る努力を払うべきであろう。



西ドイツ（当時）50mプールと飛び込みプール

Profile

みやした みつまさ（財）日本水泳連盟参与
宮下 充正 放送大学教授・東京大学名誉教授
「子どものスポーツと才能教育」02（大修館書店）
「最近の主な著書」
「中高年のためのフットボール・サイエンス」04（大修館書店）